Perivascular and Interstitial Fibrosis in the Kidney Associated with Liver Cirrhosis: A Histopathologic Study of Autopsy Cases

杏林大学医学部病理学II教室 研究生
前田 きみ子

主論文の要旨

肝硬化症に伴う腎変化としては、病理学的には糸球体変化が特に研究されてきたが、臨床的には、Epstein等により、患者の生前の腎血管造影では皮質影陰口の欠如がみられ、死後の造影では異常がみられないことが指摘されている。この血流障害の原因は腎皮質動脈の挙動に よるとされている。一方、本教室では、肝硬化症においても、形態学的に糸球体血管柵の拡張が高率にみられることに注目してきた。この所見は血流障害部位が輸血動脈以前でなくて、輸出動脈以後の静脈系にあることを示唆している。よって今回、この血流障害の原因となる 腎間質変化の組織学的特徴ならびにその存在部位を検討した。

〔研究方法〕

杏林大学および関連病院の過去10年間の肝硬変症剖検腎25例を用いた。糖尿病症腎症、急性尿細管障害、原発 性および転移性腎腫瘍、腎盂腎炎の合併する例は除いた。

腎組織切片は HE, PAS, コロイド鉄 PAS 染色、El-VG 染色を行って、肉眼的、光顕的、観察検討した。腎 の間質変化の分類については、間質の線維化のないものは Grade 0, 蛍間弓状静脈周辺に線維化が存在する が、筋質で、皮質に及んでいないものを Grade 1, 線維化が極めて強く、小葉間静脈周辺にまで及んでいるものを Grade 2 と分類した。また間質変化に関し、急性および慢性腎盂腎炎31例と比較検討を行った。

〔結果〕

肝硬変症の際の腎組織には、現在までに知られている 糸球体変化がほぼ半数例にみられたほかに、静脈系周間 に著する線維化が80%の症例に存在することが明らか にされた。即ち、Grade 1が16例、Grade 2が4例であった。この強い線維化は、葉間、弓状および小葉間静 脈周辺に限局し、しばしばリンパ球浸潤を伴っていた。 竹内によって提唱された venous muscular complex はこ
の強い線維化によって萎縮していた。この venomuscul-
ar complex が腎の静脈を押す作用があるとすると、静脈周囲の線維化によるこの complex の萎縮が腎
血流障害を引き起こす原因となることが強く示唆された。
対象とした急性および慢性腎盂腎炎例ではこれら静脈周
囲の線維化の程度は軽く、進行した慢性腎盂腎炎でも著
明な線維化はみられなかった。即ち、線維化や細胞浸潤
は血管周囲に限局せずにみられた。また肝硬変症で
みられた腎糸球体血管収の著明な拡張は急性および慢性
腎盂腎炎ではみられなかった。

（日本腎臓学会誌 29：1-7, 1987）

論文審査結果の要旨

論文審査委員 永原 貞郎，斎藤 昌三，佐藤 喜宣
千野 一郎，長沢 俊彦

本論文は、肝硬変症における腎の形態学的変化と、腎
血流障害との相関を究明しようとしたものである。

研究対象として、肝硬変症のうち糖尿病性腎症・腎盂
腎炎などの合併例を除いた25剖検例の腎臓を、また対照
群として急性および慢性腎盂腎炎31例を用いた。まず腎
間質病変を、0度（間質線維化のないもの）、1度（線
維化が葉間および弓状静脈周囲にあるもの）、および2
度（線維化が著しく、小葉間静脈周囲およびそのもの）に
分類した。症例の半数に糸球体硬化がみられた他、約80
％に静脈周囲線維化（1度16例、2度4例）が証明され
またリンパ球浸潤を伴い、さらに veno-muscular com-
pex（VMC）萎縮と糸球体血管収の著しい拡張が認め
られた。しかし対照群では、静脈周囲線維化は軽度にみ
られたに過ぎない。結論として、血管周囲線維化に基づ
く VMC 萎縮が、腎血流障害の原因であろうと示唆さ
られたが、その臨床的意義は大きい。

審査の結果、学位論文として価値あるものを認めた。
（授与：乙ー66 昭和62年10月16日）